

## 龍ヶ崎市公共施設再編成の行動計画策定に係る有識者会議（第5回）議事要旨

- 1 日時：平成25年10月31日（木）14時～16時
- 2 場所：龍ヶ崎市役所5階全員協議会室
- 3 議題：（1）龍ヶ崎市公共施設の新しいカタチに対する提言について
- 4 出席者：  
委員：藏田委員長、倉斗副委員長、西尾委員、岡田委員、志村委員、松尾委員、飯田委員、龍崎委員  
事務局：【企画課】島田課長補佐（行政改革推進グループリーダー）、小林主幹、関口主幹  
【財政課】生井係長  
【アドバイザー】PHP総研 佐々木氏

### 5 議事要旨

「（1）龍ヶ崎市公共施設の新しいカタチに対する提言について」、事務局から資料の説明があった後、議論が行われた。委員の発言の要旨については以下のとおり（議事録については別途公開する）。

▼学校は「人を育てる場」、そして「将来の市民を育てる場」というニュアンスを文章に活かしてもらいたい。

▼職員が全体像、ビジョンを共有することが大事である。

▼サブタイトルの「公共施設のトップランナー」という言葉遣いに違和感を感じる。また、「ファシリティマネジメントの先進地」との表現についても、現在はファシリティマネジメントの概念が広がってきているため再考してはどうか。

▼9ページの第3章の部分がまとまっているために提言のようになってしまっている。第1、2章のまとめだと分かる形がよい。

▼この有識者会議は大変有意義だったので、参考資料のなかに会議の議事要旨を入れてはどうか。

▼市民との情報共有の際、行政は全市的、将来的視点で行政は物を言うが、市民は地域的、現在の視点で考えるため情報の伝え方を考えた方がよい。また、一時に大量の情報を提供しても何度かに分けて少しずつ、繰り返し行うことが大切である。

▼行政内部の連携について、進まない自治体の典型的な例として挙げられるのが、頻繁に組織が変わる、人が変わるところである。市役所の人事システムの常識から外れるかもしれないが、意欲のある人を長く携われる配置にすることを提言したい。また、世代間の捉え方もバラつきがあるので、若い人の配置を考慮するべきである。

▼学校の総量削減とあるが、学校施設の問題は非常にデリケートである。学校施設の「総量適正化」という表現がよいのではないか。

▼「新しいカタチ」の中味が曖昧である。新しい概念であるので、職員も市民も共有できる説明が欲しい。これまでの公共施設は「物」だった。それを「新しいカタチ」とは、「目的」重視、例えばまちづくりを考えていくことである。また、「プロセス」重視、これまでの行政主導から市民と一緒に考えていくことであると考え。

▼文字は受取手によって、印象が全く異なる。ポンチ絵で書いてはどうか。

▼「新しいカタチ」は曖昧でよいのではないかと思う。その方が、受取側にもやる気、夢が持てるというメリットもある。具体的にカタチとは、実際に何かものができた時に見えるものかもしれない。例えば、既成概念とは違う公共施設を考えていく、創り上げていく、というのはよいかもしれない。

▼ポイントは「新しいカタチ」は市民と一緒に作っていく、あるいは市民が施設を担っていくということである。だとすると、情報共有だけでは弱く、市民と協働していくと位置づけた方がよい。

▼大きな理念（目的）とその実現のための公共施設の再編成である。経験的に大きな理念、目的なくして再編成は前進しない。

▼龍ケ崎市としては、「次世代」「将来」を相当意識している。

▼学校については総量削減に傾きがちだが、文科省でも学校をコミュニティの核にしていく方向性が示されている。これが「新しいカタチ」の一番分かりやすい例だ。

▼学校の活用に関しては、学校長の意識が前面に出ている事例がある。学校の人材のモチベーションを維持できる仕組みも重要だという情報も聞いている。

▼龍ケ崎市は、学校単位でコミュニティをまとめていこうという計画があり、その中核的な施設としてコミュニティセンターを活用していこうとしている。しかし、施設数として足りない。その傍らで学校施設が空いているので、その余裕スペースを使うのはよい方法だと思う。

▼戦略的に取り組んでいくことは望ましい。トップランナーであろうと思うことで、市民を日本一幸せにするという気概を持てるのではないか。

▼5ページの5番の専任組織の設置では、3つの分野に跨がっている。「企画・行革部門」「技術・建築部門」「財政部門」。この3つの組織の連携は必要になるだろう。

▼組織でトップマネジメントが必要である。市長部局、教育部局双方に言える。

▼「数値目標の設定の必要性」についての記述は必要だろう。数値の中味は次の段階の議論でよい。

▼市民との意見交換については「行動計画策定について」と「実際にカタチをつくっていく（再編成していく）」をしっかりと分けて、相互にやっていくべきことを書いた方がよい。

▼PDCAサイクルで「Check が課題」とあるが、次の「Action」こそ重要になる。さいたま市では、マクロ分析して数値目標を設定した。毎年どこまでできたか、やり方を変えるか等ダイナミックに捉えていく。

▼そして、さいたま市で直面している問題として複合化がある。「新しいカタチ」でまず想定されるのも複合化だと思うので、これを理念として登載時期の見直しの部分に示すとよい。

▼更新時期に拘ると、傍の施設の議論をしないことになりかねない。「周辺施設も含めて一体的に検討を行う」趣旨の文章を入れた方がよい。その際、市民と目的の確認を繰り返し行うことが大切。

▼一種のコミュニケーションプランを提言の中に入れられたらよい。例えば、コミュニティ単位で施設再編成を考えるとというなら、意識、情報を共有していくという仕組みを、事前に計画的（対象、方法）に組み込んでいくという趣旨を提言に盛り込めるとよい。

▼総論で反対する人はほぼいない。だが、総論に興味を持つ人も少ない。各論に入ると、賛否入り乱れての議論になる。しかし、総論を飛ばして、各論ということはない。

▼市民との協働は、まさに総論と各論を行きつ戻りつするのではないか。この過程で市民が自身の言葉で議論できるようにするとよい。具体論で初めてコミュニケーションできるようになる。

▼具体例が出てくると、地域的、現代的な議論になる。マネジメントしている職員、専門家も流されてしまうことがある。したがって、コミュニケーションのなかで少し引いて考え、総論と各論を反復できるとよい。

▼既成概念にとらわれない人を引き込む段取り、準備が必要だ。

▼9ページの Check の実行役が形式的でないならば、相当の資源を投入し専門性のある人材、機関にチェックを依頼するという趣旨も考えられる。チェック機関を地元ありきではなく、広い視点から必要な機関・人材を活用するほうが望ましい。